

シナリオ「画用紙の女」

2018.08 執筆完了

作・青木ドナ

あらすじ

福田歩（32）はCG制作の仕事に就き、社内一の腕利きだが、人間的に問題があるトラブルメーカーだ。

生後すぐに両親が離婚し、彼には母親の記憶が全くない。イラストレーターだった父は、男手一つで仕事や趣味や、家事までも楽しみながら福田を育てた。福田も幼少時から父の手ほどきで餃子の作り方を覚えた。だが、父が急逝し、恋人はおろか、友達もいない福田は、突然、世の中に一人残される。

葬儀に父の遺した「ママ」のイラストそっくりな女が現れた。その女は自分の実母なのか？ 福田は、おせっかいな後輩の男・田中に命じ、その女の後をつけさせたが、失敗。手元に田中の撮ったピンボケ写真だけが残り、気持ちが悪わつき始める。福田と田中は忌引きの間、母親だと思われる「画用紙の女」探しをはじめ。だが、30年以上の年月が立ちただかり簡単にはいかない。おまけに、田中の持ち込んだ猫までが福田の神経を逆なです。搜索の過程で、「画用紙の女」は福田の実母ではなく、実母は出産後育児放棄の状態になり、親権を夫に渡し離婚したが、その後異国で再婚し、今は幸せに暮らしていることがわかり、福田は、自分の出生を呪い、苦しみ始める。

社内の同僚、バツイチの女・瑞希は、ライバルである福田が大嫌いだ。だが、田中から作業上の相談を受け、福田の事情を知り、仕事の手助けをしてしまい、ついには福田の背中を押して「画用紙の女」探しに自分から首を突っ込む。瑞希が加わったことで搜索は意外な進展を見せ、認知症の祖母から「みなみ」という名前のヒントを聞き出せた。だが、最終段階目前で、福田は急に中断を告げる。瑞希は、自分が子供を手放した過去をも曝け出して、「画用紙の女」と向き合うよう福田を叱咤する。

福田は「画用紙の女」三木みなみと対面する。父の恋人だったみなみ手作りの餃子が、父の味だったことに驚くが、父の餃子に込められていたすべての真実を受けとめた時、福田の身体の中に温かさが広がる。

忌引きを終え、仕事に戻った福田。彼は、他人の思いやりを素直に受けとめられるようになっていた。何故かあふれ出した涙は、もう、自分では止められない。

※ 内容は2018年8月時点での社会状況に準じています。2025年では、一部修正が必要などころがありますが、未修正で公開します。

【登場人物】

福田 歩	(5)(32)	CGデザイナー
田中 勇太	(26)	福田の後輩
竹下 瑞希	(30)	福田の同僚
福田 宏	(34)(63)	福田の父
三木 みなみ	(59)	画用紙の女
橋本 次郎	(65)	宏の元同僚
橋本 節子	(63)	橋本の妻
宇野 聡子	(61)	実母の友人
チーム長	(45)	福田の上司
宮沢社長	(48)	福田の会社社長
福田 佳代	(87)	福田の祖母
同僚 A	(27)	女性社員
同僚 B	(28)	男性社員
パン屋店主	(47)	「プチ・カルトン」店主
女性受付係	(38)	吉田動物病院受付

○福田の家・キッチン・中

福田歩（5）がキッチンの床に座り、女性のイラスト（エプロン姿で手に餃子をのせた皿）が描かれたスケッチブックをじっと眺めているが、急に立ち上がる。福田に背を向けて作業している父・福田宏（34）の方へ小さな椅子を運び、乗って父の手元を見る。

男の手が長く伸ばした小麦粉の生地を小さく均等にちぎり丸める。

丸めた生地を小さな麺棒で円盤状に伸ばし、具を入れて餃子に成型、次々と包まれる餃子。

じっと父の作業を見つめる福田。

宏「美味しいの、すぐできるぞ」

福田「すごいね、パパ」

宏「歩、パパ、達人だろ？」

福田「（内緒話のように）ママって、パパより餃子の達人？」

宏、手を止め、複雑な顔で福田の顔を見る。

じっと宏を見つめて答えを待っている福田。

妙な緊迫感をもって見つめあう二人の姿。

宏「（かすれた声）——そうだよ」

福田「（真面目な顔で）僕も達人になる」

背伸びをして皮を取り、肉餡を乗せようとする

福田の手を、宏が包むようにして持ち一緒に餃子を包み始める。

○福田の家・キッチン・中（二十七年後・夜）

餃子の皮に肉餡を詰めて包んでいく福田歩（32）の手。

次々と餃子を包みバットに並べていく。

だらしのない伸びきった部屋着姿の福田の後姿。

若いTシャツを着た福田宏（63）が、キッチンに入ってくるが、福田を見てやれやれ、という顔。

ダイニングテーブルの上にある開かれたスケッチブックには途中まで描かれた細密なロボットのイラスト画。

スケッチブックにパラパラと目を通す宏。

宏「お、これ、いいなあ」

福田「いや、動かしてみると、違うって時もある」

宏「動画か。もうちょっと若けりやなあ」

福田「アナログ世代には、もう無理だね（ゆで上げた餃子を皿に盛ってテーブルにだす）」

宏「おい、アナログだって現役メディアだ。手描きの絵、つてのは、醸されて味わいが増すんだよ。」

古酒と同じさ（ビールを福田に注ぐ）」

福田「酒、ね。出張、明日だっけ、どこ？」

宏「金沢さ。旨いものの宝庫」

宏、餃子をほおぼる。

福田「あ、そう（イラストを描き続けている）」

宏、福田をじっと見る。

宏「歩、お前、免許皆伝だな」

福田「え？」

宏「料理も絵も、教えてやること、もうなさそうだ」

福田「（餃子を食べ、味を見ながら）こっちは、——まだまだ」

宏「息子に気を遣われる、か……（ため息）」

福田はイラストを描きながら、宏はTVを見ながらそれぞれ食事続ける。

○同・居間・中（夜）

二人が食事をしているキッチンに隣接した居間の中、片隅に積まれた新、旧のスケッチブックの山、音もなく崩れて交じり合い広がる。

タイトル『画用紙の女』

○福田の家・玄関・（朝）

古い戸建住宅の小さな玄関、レトロな雰囲気には飾ってある。

すっきりしたジャケット姿の宏が額縁風の鏡でネクタイをなおしている脇に、大きなリュックを肩にかけ、寝ぐせの頭、首にヘッドフォンをかけ、ヨレヨレのパーカー姿の福田が来る。

宏「おい、寝ぐせ」

福田「どうでもいいよ」

宏「少しは、らしく、なあ」

鏡で寝ぐせを直すふりをする福田。

福田「面倒くせ……」

宏「モテたくないのか。第一、そんなにヨレヨレじやひと様から不快に思われる」

福田「他人なんて関係ねえし、女はウザい」

宏「絵描きには実社会の刺激が、——」

福田「もはやネット時代だって（と、ドアを開ける）」

宏「（諦め）——帰ったら、オデンで一杯やろう。屋

台で昭和っぽく、な？」

福田「（適当にうなずく）俺、先に出るから」

宏「留守、頼むな」

歩き出しながら、ヘッドフォンをかける福田。

福田の耳に大音響の音楽。

振り返らず、出ていく福田。

福田の後姿をちよつと見て、鍵をかけて反対の方向へ去っていく宏。

○宮沢ラボ（株）CG部・中（朝）

ワンフロアの室内、パーテーションに仕切られ、ディスプレイの置かれたデスクが並ぶ。

奥まった一角のアイランド型の流し付きカウンターに給茶機、菓子類などが置かれ、派手目な化粧、服装の女・竹下瑞希（30）が「竹下私物」と書いてあるサーバーで、仲間に淹れたコーヒーを注いで配り、楽しげに談笑している。

○同・中・入口近くの通路（朝）

デスクの間の通路真ん中に、ごみ箱の上に堆く積まれた資料ファイルや本、変なフィギュアなど。

大音響の音楽を聴きながら不機嫌な顔で入ってきた福田、躊躇なく直進しごみ箱を思いつき蹴る。

○同・中・アイランド・カウンター（朝）

入り口の方から、ごみ箱を蹴る音や物が散乱する音がして、瑞希と同僚Aが注目する。

福田の「通行の邪魔だっ、バカヤロツ」という怒鳴り声と、慌てて謝りながら片づける社員の姿が見える。

福田、不機嫌極まりない顔で遠くの隅にある自分

の席に座るが、堆く積まれたファイルに隠れて姿が消える。

瑞希「チッ（福田を睨んで舌打ち）」

同僚A「あのファイル！ 福田タワー、前よりもさらに高くなった気がしません？」

瑞希「睨んで」あれは隔離壁。高けりや高いほうが目障りなものを見ないですむのよ」

同僚A「そういう見方もアリ、ですね」

ひととき変わった服装と髪形の男・田中勇太（26）が、福田の方に子犬のように走り寄っていく。

田中「福田先輩、おはようございます」

途中で瑞希の方を見て福田を指さしマグカップを振るが、瑞希は無視し残っているコーヒーをこれ見よがしに流しに棄ててしまう。

○同・福田の席（朝）

部屋の片隅に置かれた福田のデスクの上には、2台のディスプレイ、雑多に置かれたスケッチ類と、「絶対触るな！」と、メモが貼ってある堆く積まれたファイル。

不機嫌そうな福田が複雑なCG作業をてきぱきと進めていると、田中がやって来る。

福田「（嫌そうに瑞希を見て）田中、余計なこと、やめろ」

田中「もう和解してもいい頃じゃないですか。竹下さん、仕事もできるし、頼れる女子だし」

福田「和解？ なんで俺が。馬鹿も休み休み言え」

田中「突然辞めちゃったあの女の子にも問題あったのは、確かですけど」

福田「問題？ あれは、詐欺、犯罪だ」

福田は不機嫌な表情のまま休まず作業を続け、ディスプレイには高度に美しいグラフィックの世界が広がっている。

田中「（ディスプレイに見とれながら）そんなー、あの子、ちょっと嘘ついて、会社休んで旅行に行っただけじゃないすか」

福田「連絡が付かないまま、クレームの尻ぬぐいをさせられた。元々半端な出来だったから、最初から設定しなおして、こっちは徹夜作業だった」

田中「でも、先輩が対応したから、客先の文句もすぐに引っ込んだし……」

福田「挙句、問題点を指摘したら泣き叫んですぐに辞めやがった。しかも、あの女（瑞希を睨んで）言い方がセクハラだ、パワハラだとか騒ぎやがって」

福田、鮮やかな手並みで次から次へと作業を進めて、田中、目で追うが追いつかない。

田中「少おし手加減して、柔らかく注意してあげればよかったんですよ」

福田「プロ同士でそんなことされたら、俺なら激怒するね」

田中「でも女子だし……」

福田「男でも女でも半端で納得するやつは、辞めちまえ。出来上がった、って思ってからがプロの葛藤の始まりだ」

田中「始まり、ですか」

福田「それに、田中、竹下は女子か？ 中年女に女子は嫌味だろう（と、鼻で笑う）」

田中「先輩にお茶、お茶……（とコソコソ去っていく）」

福田、急に手を止めてリュックからスケッチブックを取り出すが、なんだか違和感がある。

福田「？（と、スケッチを開き確認）」

よく見るとスケッチブックはかなり古びている。

福田、パラパラとめくって見始める。

○画用紙画面

少し変色した画用紙に描かれた消防車や動物のイラストのページをめくり、手が止まる。

そこにはボブ・ヘアでエプロン姿、両手には餃子ののった皿を持ち、可愛く微笑む女性のイラスト。

隅に子供の字で小さく「ママ」と書かれている。

○宮沢ラボ（株）CG部・中・福田の席（朝）
福田「……」

画用紙をじつと見つめている福田に、田中がお茶を持ってくる。

田中「（のぞき込み）これ、先輩の新キャラですか」

福田「俺のじゃないだろ」

田中「あ、タッチが違いますね」

福田「昔、父親が描いたざれ書きだ」

田中「へえ、プロ並みっすね」

福田「そう、プロのイラストレーターだ」

福田、自分のリュックの中をガサガサ探っている。

田中「お父さんも絵描きかあ。いいなあ、子供の時、絵を描いて遊んでもらったんですね」

田中、画用紙を手に取り、めくって眺める。

福田「（引き出しを探す）頼めば、何でも描いた」

田中「あ、ママって書いてある。これお母さんですか」

福田「（デスクの上のスケッチの描いてある紙をガサガサ探しながら）——かも、な」

田中「この絵、可愛いなあ。今度お母さんの写真、見せてくださいよ」

福田、田中が期待に満ちた表情で答えを待っているのに気が付く。

福田「（睨みつけるが、田中には効かないので仕方なく）——うちに写真はない。一枚も」

田中「えっ、何で？」

福田「たぶん、俺が赤ん坊の時に離婚した関係だろ。俺も顔を知らない」

田中「あ、それは……（ちよつと気まずい）」

福田「ずっと父子家庭で、家には、ばあさん以外の女はいなかった」

田中「30年以上？ 再婚しなかったんですか？」

福田「結婚に懲りた、のかもな」

田中「あ、でも、写真もないのに、この絵はどうして……」

福田「ある日、母親を描いてくれ、と言ったら、これを描いた」

田中、しげしげと画用紙のイラストと福田を見比べる。

田中「きつと、こんな女性だったんですね」

福田「さあな。母親は餃子の達人だって話がオプシ

ヨンについて、それで終わったな」

福田、スケッチブックを受け取ろうとするが、

田中が手を離さないで、引っ張り合う。

田中「先輩、それ、信じたんですか？」

福田「――5歳のガキだ。甘い嘘を飲み込むほうが
楽だろ」

田中「写真撮っていいですか？」

福田「勝手にしろ（と手を放す）」

田中、スマホで「ママ」のイラストを写真に撮
り、スケッチブックを返す。

田中「（写真を見て）タイトルは、画用紙の女、すか
ね」

福田のスマホが鳴り、見ると未知の番号。

福田、電話に出る。

福田「福田です。はい、宏は父です。――、ええ

っ？」

田中、のぞき込む。

福田「救急からだ。父親が車で倒れたらしい」

田中「先輩！」

凍り付く、田中と福田。

○葬儀会場「メモリアルホール輝」・中

葬儀開始前、呆然として小さな会場の椅子に喪

服姿でボンヤリ座っている福田。

祭壇には生花に囲まれた宏の写真。

橋本（63）がやって来て声をかける。

橋本「歩君、すっかり大人になったね。お父さんの

同期だった、橋本です」

福田「――ありがとうございます」

橋本「急だよな（泣いている）。動脈瘤だった？ 僕

もショックだよ。一人で大丈夫かい？」

福田「父の会社の人が、全部手配してくれたので

……」

橋本「僕さ、（名刺を出して）早期退職して、自宅の
近くで小さなデザイン会社をやっているんだ」

福田も、もそもそと服を探るが名刺を持ってい
ない。

橋本「あ、今度でいいよ。何かあったら連絡して――
（嗚咽）君も身体に気をつけるんだよ。ごめん
な、年のせいかな涙もろくてさ」

泣きながら去っていく橋本を、うつろな目つきで見ている福田。

× × ×

葬儀が始まり、僧侶が経を読み、一般の焼香客が入ってくる。

福田、ぼんやりと見ていると一人の女の姿が目飛び込んでくる。

喪服を着て少し老けているが、髪形はボブ・ヘア、イラストの「画用紙の女」にそっくりである。

女は焼香をすませてそのまま帰って行く。

田中に「あれをしろ」と、目配せをする。

田中も気が付き、画用紙の女を見て驚く。

福田、田中に「尾行しろ」とジェスチャーし、

田中、慌てて女の後をつけていく。

読経の音が耳の中で反響しはじめ目が回りそうな福田、唇をかんでこらえる。

○駅へ向かう道（商店街）

駅へと続く小さな店の並ぶ商店街、人通りの少ない道を歩く画用紙の女の後姿。目立たないように尾行する田中。

○私鉄駅（駅名は必要か？）改札口・中

画用紙の女は駅の改札を入っていく。

田中も入ろうとICカードをタッチするが、残高がなく入れない。

慌てて自販機でチャージ、改札に入る。

○ホーム・階段・中

田中がホームへ続く階段を降りてくるが、すでに電車が入っている。

画用紙の女が車内で吊革につかまっているのが見える。

田中、ホーム階段からスマホで写真を撮ろうと、望遠にして、ピントを合わせた瞬間、後ろから来た老女に突き飛ばされ、シャッターを押してしまう。

電車は発車。

田中「（声にならない叫び）うわー」

田中、自分のスマホ写真を確認。

田中「あ、撮れてる——、か？」
遠ざかる電車。

○福田の家・玄関・中・(夜)

お骨、写真、位牌、アレンジ花などを持って一人で薄暗い玄関に入ってくる福田。

福田がスイッチを入れ、玄関に灯がともるが、明るいのは玄関の部分だけで、短い廊下の先の、ガラスの入ったドアの奥にあるキッチンが暗闇に沈んでいる。

○同・宏の部屋・中(夜)

宏の部屋に灯りがともる。

デスクの上の筆立てに、色とりどりのサインペンや色鉛筆、絵の具筆などが分類されている。

宏のデスクの上にお骨や遺影・位牌、花、線香、香炉などを置く。

片付いている室内を見まわす福田。

宏の趣味のキャンプのグッズや車のミニカー、資料本や料理の本などがきれいに分類、ディスプレイされている。

部屋の明かりを消して、引き戸を閉めて出ていく。

○同・福田の部屋・中(夜)

雑然としている室内。

デスクの上には大きなデスクトップパソコンとディスプレイ、ペンタブレットなど、電子機器類、その足元の床の上にも描きこまれたデザイン画やスケッチが散らばっている。

ベッドに入ろうとすると、田中から電話が入り、電話に出る。

田中の声「(突然)すみませんっ。自分、尾行に失敗しました。駅で、もたついていたら電車が出ちゃいました」

福田「そうか——」

田中の声「でも一応、写真、撮りました。今、送ります」

福田のスマホに写真が送られてくる。
開くとピンボケの写真。

福田「これ——（がっかり）」

田中の声「この人、絶対あの絵の女性です。画用紙の女、探しましょう」

福田「いいって」

田中の声「お母さん、来ていたのかも」

福田「ないね」

田中の声「でも——」

福田「切るぞ」

田中の声「すみませんでした。あの……」

福田「なんだよ」

田中の声「何でも言ってください。例えば、気が変わったとか、でも——」

福田「ない」

福田、電話を切り、考え込む。

福田「うざいんだよ」

布団をかぶって寝るが、考え事で頭が回り始めうまく寝付けない。

○福田の夢

福田が霧の中で「画用紙の女」のイラストを見ていると、イラストが動き始め、突然、画用紙の中からイラストが飛び出し、現実の喪服を着た「画用紙の女」になり、逃げるように歩き出す。

福田が真っ白い霧の中に歩き去ろうとする女の後姿を追いかける。

福田「（喉をかきむしる）おか、さ、……」

福田、「お母さん」という言葉を絞り出そうとするが出てこない。

追いかけても、遠ざかる画用紙の女の後姿。女、どんどん濃くなる霧の中に急ぎ足で去っていく。

霧が立ち込め、視界が利かなくなる。

白い霧の中に女が吸い込まれていく。

福田「（叫ぶ）おいっ、待てよっ、なんで今頃現れたんだっ」

（夢、終わり）

○福田の家・福田の部屋・（朝）

もがきながら、はっと夢から覚め、頭をかきむ

しる福田。

のそのそと起きだす。

○同・キッチン・(朝)

福田が一人、手作りした朝食を食べている。
おもむろにカレンダーを見て、何かに気が付く。

○道路ごみ捨て場・外(朝)

福田がごみ袋をごみ捨て場に置く。

○同・玄関・中(朝)

福田がドアから戻ってくる。
家に入り、中を見回す。
何の音もしない。

○同・キッチン・(朝)

福田が入っていくとキッチンの中に2次元イラストの「ママ」の幻がひらひら動いているのが見え、目をこする。
もう一度見ると幻は消えている。
キッチンから続く居間を見る。

○同・居間・中(朝)

居間へ入り、引き戸を開け、次の間にある父の部屋に行く。

○同・宏の部屋・中(朝)

父の部屋から居間越しにキッチンが見える、ガランとした空間。

○同・居間・中(朝)

福田、居間の壁に掛けてあったヨレヨレのパーカーを手取る。

○同・玄関・中(朝)

福田がパーカーを着て、ふらっと出ていく。
閉じられる玄関ドア。
朝の光だけが静かに差し込んでいる玄関。

○宮沢ラボ(株)CG部・中(朝)

頼りなげな優男・宮沢社長(48)が社員の前に立っている。

総勢20名くらいのスタッフが取り囲む。中には瑞希、田中の姿もある。

宮沢社長「報告します。わが社初めての、大プロジェクト受注が決定しましたっ」

湧きあがる歓声と拍手。

髭面の男・チーム長(45)が前に出る。

チーム長「中国の大手通販系ITメディア『モルディ』がスポンサーの、実写映画、『翡翠城の姫君』のCGだ。うちは特別指名で参加が決まった」

宮沢社長「中国全土で公開後、世界配信される予定です」

チーム長「下手な仕事をすれば、その酷評も世界配信だぞ」

どよめくスタッフたち。

宮沢社長「今まで経験のない長期戦です。品質を落とさず、しっかり仕事を仕上げるために人事組織改革を行う予定です。皆、頑張りましょう」

社長、去っていく。

興奮に沸き立つスタッフたち。

チーム長「実は、スポンサーのCEOのお子さんが、うちのCGアニメ『ワンワンと僕』の大ファンで、指名をもらえた」

田中「あれって、確か…(と、瑞希を見る)」

チーム長「担当は福田と竹下の班だったな。二人ともガチに衝突して頑張った甲斐があったぞ。大貢献だ(拍手する)」

拍手と称賛する人々に囲まれ、誇らしそうな瑞希。

田中「すごいことになりました！これはすぐに福田先輩にも知らせないと(と、スマホを取り出す)」

同僚B「(田中の手を止めて)だめだよ、田中。福田さん、忌引き中だぞ」

同僚A「お父さん亡くしたばかりだし」

田中「そう、そうですね。なんか先輩が忌引きで会社を休んでいる、っていうイメージが——(と、福田のデスクを振り返る)」

スタッフたち皆、しんみりして福田のデスクを振り返って見てギョツとする。

いつものようにファイルタワーの影で福田が仕事をしており、スタッフたちが見ているのに気が付いた福田、不機嫌そうに無言で頭だけ下げた。

人をかき分けて瑞希が福田に近寄る。

瑞希「ちよつと、その人、帰りなさいよ」

福田「(仕事をつづけながら) もう戻れる。大丈夫だ」

瑞希「そんな時にする仕事なんて、絶対クオリティに影響出ますね。はっきり言って、周りはおそらく迷惑ですから」

ムカついた顔で瑞希を睨む福田。

福田「偉そうに、決めつけやがって」

瑞希「一般的な見解です。みんな忙しいから、あとから尻拭いをさせられたら、困るんです」

福田「(怒鳴る) 俺を、そこいらの出来損ないと一緒にするなよ」

にらみ合い、一触即発の瑞希と福田の間をチーム長が割って入る。

チーム長「忌引き休暇は一応わが社の就業規則に定めてある。労基もうるさいし、今回は規定通り休め。俺の許可なく会社に来るな。帰れ」

福田「(何か言いかけるが、のみ込む) わかりました。帰ります」

乱暴に帰り支度をして、スタッフの間を縫って出ていく福田。

○会社のエレベーター・中

仏頂面でイラついてエレベーターに乗っている

福田の携帯に着信音。

見ると田中のライン。(画面にテキストを吹き出しで表示)

テキスト…(田中の声で読み上げ)

田中の声「忌引きを使って、画用紙の女を探しましょう。全面協力します」

福田、画面を見ながらしばし動きを止めるが、すぐに足をイラつかせて踏み鳴らす。

田中から次のライン。

テキスト…(田中の声で読み上げ)

田中の声「自分も、もう一度あの人に会いたいです。それに先輩、仕事もなしで時間、どう潰します？」

福田「田中の野郎(舌打ちし、ラインに返答)」

テキスト…(福田の声で読み上げ)

福田の声「今日午後イチに、東区役所で待つ。お前の余興プランにのってやる。代わりに、仕事の情報はリークしろ」

田中から「御意」のスタンプが返ってくる。

○宮沢ラボ(株)の入る建物・表

福田がヘッドフォンをかけると大音響の音楽。

昼間の光の中の会社を見あげるが、まぶしくて目を細める。

道を歩く中年女性のグループや小さい子連れ、主婦の姿、老人夫婦の歩く姿を珍しそうに眺める。

福田、知らない街のようにキョロキョロしながら歩き始める。

○東区役所・入口・中

福田が入っていくと、場違いな服装の田中が待っている。

田中「先ずは何からやりますか？」

福田「謄本をとる」

○福田の謄本書面

謄本の福田の母親の欄には「鈴木美保子」とあり、結婚前の住所が「世田谷区松林3丁目11」とある。

○区役所ロビー・中

隅のソファに腰かけて、

田中「世田谷の松林。手がり第一歩ですね。美保子さん、キレイな名前、っすね」

福田「こんな字か……」

田中「冗談ですよ」

福田「いや、マジで」

田中「あり得ないでしょ。何で知らないんですか」

福田「興味なかったし」

田中「でも、自分のことって、気になりませんか？
普通は——」

福田「俺の家は、普通じゃなかったんだ」

田中「秘かに考えたりもしなかったんですか」

福田「例えば、だ。お前が砂漠生まれなら、何も考えず砂漠の生き方、風土に馴染む。疑問なんか持たない。——だろ？」

田中「そうすかね」

福田「田中は疑問があつたのか？」

田中「何も。ごく普通、つつうか、岩手の実家に、父、母、妹、自分です」

福田「ごく普通、ね……」

田中「じゃ、その住所へ行きますか」

福田「お前、ルート調べろよ」

田中「了解つす（と、スマホを操作）」

○世田谷区松林3丁目・公園・前

福田と田中が樹木の茂る小さな公園の入り口前に立っている。

田中がスマホの地図を調べている。

田中「おかしいなあ。やっぱり、何回検索しても、ここですね」

福田「この公園か？」

田中「もう一回、謄本見てもいいですか？」

福田、謄本を渡す。

田中、再度スマホ検索する。

田中「やっぱ、ここですね」

福田、向かいにパン屋があるのに気が付く。

福田「あそこで聞くんか」

田中「そうですね」

二人、小走りで道を渡り、向かいのパン屋に向かう。

○パン屋「プチ・カルトン」店内

福田がカウンターにいる店主（47）に声をかける。

福田「あの、ちょっといいですか？」

パン屋「はい？」

福田「向かいの公園——いつから公園ですか？」

パン屋「——私がこの店を開いて7年ですが、もうその頃は公園でしたね」

田中「その前の事って、分かります？」

パン屋「(考えて) お客様のお話だと大きな屋敷があって、相続税の関係で公園になったとか……」

福田「そうですか……」

福田、考え事をしながら、先に店を出ていく。

田中「これ下さい(と、手近にあった食パンを買う)」

パン屋「(パンを渡し) ありがとうございます」

田中も店を出ていく。

○同・外・(夕方)

少し離れたところに立っている福田が公園を見ている。

田中「誰もいないんじゃ、手詰まりになりましたね」

福田「家に寄るか？ 作戦会議だ」

田中「了解っす」

田中と福田、黙って歩き出す。

日が傾き公園の緑が黒くシルエトになっている。

○福田の家・キッチン・中(夜)

福田と田中が入ってくる。

福田「適当に座っている」

福田、田中に缶ビールを渡すが、田中、キョロキョロする。

田中「先輩、あの、お父さんはどちらに？」

福田「父親の部屋。隣の居間を突っ切ってその隣だ」

田中「ちよっとお線香を」

福田、田中を案内する。

○宏の部屋・中(夜)

福田が電灯をつけ、田中を入れ、すぐ出ていく。

田中、キョロキョロと辺りを見回す。

キッチンにいる福田の後姿をちらっと見る。

田中、手の中の缶ビールをそっと遺影の前に置

く。

○キッチン・中（夜）

田中が神妙に拝んでいる姿を、キッチンで料理しながら見る福田。

○居間・中・（夜）

福田と田中が雑多なありあわせの料理でビールを飲んでいる。

田中「（バクバク食べながら）次の手はどうしますかね」

福田「誰かにお前の撮ったピンボケ写真を見せて、母親かどうか聞いてみるしかないな」

田中「先輩の親戚とか？」

福田「老人ホームに祖母がいるが、今は孫の顔だつて忘れてる」

田中「じゃあ、お父さんの友人関係とか？」

福田、膝をたたき立ち上がり、財布の中から高橋の名刺を取り出す。

福田「葬式で声をかけてきた男がいた。古い付き合いだったな」

田中「きつと画用紙の女に近づけますよ」

福田、名刺を見ながら電話をかける。

コール音、数回。

福田「高橋さんですか？ 福田歩です。先日は父の葬儀に来ていただいて、ありがとうございます。た。あの、ですね——」

○カフェ「ロメオ」中（午前中）

福田が高橋とその妻（63）と向かい合って座っている。

高橋「妻の節子。彼女も同じ会社で働いていたから連れてきたよ」

節子「この度は……。と、深々とお辞儀」

福田もお辞儀を返す。

福田「すみません。俺、母親の顔も知らなくて……」

高橋「32年前だ。そんなもんだろ。で、写真は？」

福田、スマホで田中の撮ったピンボケ写真を見

せる。

福田「この人は、父の元・妻、——俺の母だった人でしょいか？」

高橋と節子、老眼鏡を取り出して、かけたり外したりしながら写真を見る。

高橋「うーん」

節子「はつきりとは……」

福田「感触で結構です」

節子「（高橋を見て）違う、かな？」

高橋「そう、だな」

福田「——ですか」

節子「どうしてこの人だと思ったのですか？」

福田「この女性、父の遺したイラストにそっくりだったんです。それで——（と、スマホのイラストを見せる）」

高橋、節子ともイラストの写真を見るが、少し首をかしげながら。

節子「——写真の人、イラストに似ていますけどね」

福田「あの、例えば、父の結婚のなれそめとか、ご存知ですか」

高橋「え、それも聞いてなかったのか」

節子「たしか、社内の同期の人の結婚式でしたよ。

お母様は花嫁側のお友達だった、そうよね？

（と、高橋に）

高橋「ああ、でも、最初は反対されたって、聞いたな」

節子「うちは小さな会社だったから。でも反対をおしきって。大恋愛ですよね」

福田「（意外）だったら、なんで、すぐに別れたんだろう。理由は言っていないでしたか？」

高橋「いや、何も。黙して語らず、こっちも聞かず、だったね」

節子「そういう事って、大恋愛ゆえに、なのかもしれませんね」

福田、不可解な表情で、腕組みをするが改めてスマホの写真を見る。

福田「——母の事を知っている方、ほかにご存知でしょうか？」

高橋「うーん……（考え込む）」

節子「女性のネットワークの方が繋がるかもしれないわね。心当たりに聞いてみます。ご連絡先をいただけますか？」

福田「(高橋と節子に名刺を渡す) よろしく願います」

節子「——あの、老婆心ですけど、お父様がずっと言わなかったことを調べる覚悟はできていますか？」

福田「(ちよつと息をのむ) はい」

○スーパーマーケット・店内(午後4時)

スーパーの時計が4時を指している。

買い物客が多い店内。

福田、疲労した様子で雑誌コーナーに行く。

料理雑誌を手に取ると、表紙は餃子の写真。

福田、速足でカゴにニラやショウガ、白菜、ひき肉などを放り込み、レジへ向かう。

○宮沢ラボ(株)・社長室・中(午後4時)

フロアの一隅に設けられたガラス張りの社長室、中からは作業中の瑞希や田中の姿が見え、デスクの時計が16:00を示している。

室内で宮沢とチーム長の二人が立ったまま困惑顔で話している。

チーム長「スポンサーとのミーティング、どうでした？」

宮沢「CEOが期待するもの、大丈夫ですよね、つて最後に言われたんだよ」

チーム長「うちを気に入って、指名して来たCEOですよ。期待って何ですかね」

宮沢「僕は、今回の仕事に挑むため、うちでは管理強化を考えている、と話ただけだよ」

チーム長「納品態勢を整えるだけじゃ、足りないってことですかね？」

宮沢「作品を認めてくれて、うちが小さくても指名した人だから、大丈夫だろうとは思うけど」

チーム長「いや、甘くはないかも。彼は、えげつないリスクカットも平気で断行する、クールでワマンな経営者だと聞きますよ」

宮沢とチーム長、無言で顔を見合わせる。

宮沢「――もし、その期待とやらを裏切ったら？」
チーム長「仕事の規模がデカイから、影響もデカそうですな」

宮沢「うーん……」

社長、チーム長、腕組みをして考え込む。
社長室のガラス越しに中の様子をじつとうかがっている瑞希と田中、フロアのメンバーたちが見える。

○福田の家・キッチン・中（夜）

福田が餃子の生地を作っている。
インター・フォンの音。
カメラを確認すると田中の顔。

○同・玄関・外（夜）

福田が出ていくと、プロジェクト資料がはみ出ている大きな紙袋を片手に握り、片手には猫の入ったケージを握ったまま、田中が糸の切れた操り人形のようにしゃがみ込んでいる。

田中「（弱弱しく）電池切れっす」

○ガス台の上の鍋

湯が沸き、次から次へと餃子が投入され、ゆでられていく。

○福田の家・キッチン・中（夜）

貼り付くようにして鍋を見つめる田中。

邪魔そうにゆでている福田。

福田「（皮肉）丁度いい時間に来やがったな」

田中「徹夜作業して、ボランティアへ行ってから来ました。ホント、丁度よかったです」

田中、調理台の上の麺棒など、器具を見渡す。

田中「本格的ですね」

福田「父親直伝だ。皮は手作り、具材には生姜を聞かせてニンニクは使わない。基本は水餃子がうちの伝統だ（と、大盛りの皿を出す）」

テーブルの上に湯気の立った大量の水餃子がのった大皿。

一礼してからガツガツ食べ始める田中。

田中「今日初めての食事だ」

福田もあきれながら、食べ始める。

× × ×

テーブルに空になった大皿や食器類。

田中がキッチンで皿を洗っている。

福田、テーブルの上の汚れた食器をキッチンの流しへ運ぶ。

田中「――でも、あの人、お母さんじゃないって、マジですかね」

福田、流しへ食器を置く。

福田「あの人たちの感想だからな。今、ほかに聞け
そうな人を探してもらっている。あと、親たちは
大恋愛での結婚、だったらしい」

田中、洗い物の水を止める。

田中「なのに子供が生まれてすぐに別れる？ わっ
かんねえ（と、頭をかきむしる）」

福田「大恋愛だとよくある、そうだ」

田中「さらに意味不明っす。もしかして、竹下さん
ならわかるのかな？」

田中、再び水を出して、皿やコップを洗い始め、
福田は洗い終わった食器や鍋を拭いていく。

福田「なんで竹下？」

田中「竹下さん、子持ちバツイチだって話ですよ。
大恋愛、だったのかも、ですね」

福田「バツイチ？ あんな性悪、結婚できたことが
奇跡だな」

田中「いい人ですよ。この間のも、先輩を心配して
言っただけです、きつと」

福田「（鼻で笑う）ないね。あんな女に騙される男も
いるんだな」

福田のスマホが鳴り、電話に出る。

節子の声「福田さん？ 今日、お目にかかりました
高橋の案内です」

福田「（居住まいをただす）あ、はい」

節子の声「実はね、今のお母さまをご存知かもしれ
ない方が、一人見つかったのよ」

福田「えっ、本当ですか？」

節子の声「また、また、の知り合いですけどね」

福田「助かります。で、どうしますか？」

節子の声「主人の会社のアドレスあてに、例の女性
の写真、送っていただけます？」

福田「今すぐ送ります。よろしくお願いします」

福田、電話を切り、名刺を取り出し早速スマホで画用紙の女の写真を添付して送信する。

田中、片づけを終えて手を拭きながらテーブルの方へ戻る。

田中「何か進展ですか？」

福田「他に聞ける人が見つかったらしい。写真の確認を待つことになった」

田中「動きましたね。じゃ、先輩はしばし、結果待ち、ですね」

田中、しずしずと猫のケージを福田に差し出す。

福田「（嫌な予感）何だ？」

田中「自分、野良猫に避妊手術して、飼い主を見つける猫ボランティア、やっているじゃないですか？」

福田「知らねえよ」

田中「今日手術をした猫です。2匹とも縫ったんで、腹巻をしています」

福田「それが？」

田中「自分、これからまた会社へ行くので、猫、お願いします」

福田「断る。猫は嫌いだ」

ものすごく嫌そうな顔の福田、それを見ていた田中が、急に笑い出す。

田中「アハハハ（急に立ち上がり）では、自分はこちらにてっ」

田中、猛スピードで帰って行く。

福田「おいっ、待てよ」

福田の目の前に置かれたケージとキャットフード。

ゴソゴソ動くケージを覗くと中に猫が2匹いる。

福田、思いつきり嫌な顔。

○同・福田の部屋・中・（夜）

福田はデスクで、田中の持ってきた新しいプロジェクトの資料、原作本などを、メモを取りながら夢中で見始めている。

カサカサという音に目をやると、床に散らかし

ているスケッチの上に腹巻をした猫がいる。
目が合う。

猫が突然そこでおしっこをする。

福田「(激怒) ばっかやろう、トイレじゃねえ」

猫をどけて、慌ててスケッチを拭く。

臭さに顔をしかめる。

猫の頭の後ろをつまみ、連れていく。

○同・居間・中・(夜)

福田が一匹の猫をつまみ居間に入ってくると、もう一匹の腹巻猫がティッシュをバリバリに引き裂いて、ティッシュの紙で室内が汚されている。

福田、猛烈な勢いでティッシュを片付け、ダンボール箱を持ってきて、新聞紙を敷く。

もう一つダンボール箱を持ってきて、新聞紙を敷き、猫をダンボール箱に突っ込む。

福田「ここで寝る、トイレはここ！」

猫、箱を飛び出し、捕まえようとする福田をからかうように飛び回る。

福田、紙皿にフードを置いて、「猫、来い」と呼んでみるが、猫は知らんぷり。

福田「(うなる) 田中のやつ、覚えてろ」

両者、間合いを取ってにらみ合いが続く。

○同・福田の家・キッチン(日替わり)

福田が、猫が破壊したダンボールベッドやティッシュを掃除している。

距離を取って遠巻きに見ている二匹の猫。

スマホに電話がくる。

福田「あ、高橋さん、昨日はどうも——」

節子の声「今、連絡があつたんです」

福田「はい」

節子の声「違うつてお返事でした。お役にたなくて、ごめんなさい」

福田「いえ。——あの、俺、その方と直接会って話を聞きたいんですが。ダメですかね」

節子の声「でも、私も直接は知らない方だから——」

福田「なんでも、本当に小さなことでも、いいんで

す。俺がそう言っているって、その方へ伝えても
られませんか？」

節子の声「——わかりました。聞いてみます。すこ
しお時間をください」

福田「待ちます」

節子の声「じゃ、またご連絡します」

福田「ありがとうございます。——なんか、無理言
ってすみません」

節子の声「いいえ、いいのよ。——今は、こんな事
でも、していた方がいいと思うわ」

福田「——どうも」

切れた電話をしばらく耳に当てている福田だ
が、猫の鳴き声で我に返る。

福田「（睨む）うるせえ」

福田が歩き出すと後をつける猫。

だが、「おい、猫」と呼ぶとどこかへ逃げてしま
う。

食器が割れる音。

見ると、一匹の猫が福田のカップを落として、
お茶をぶちまけている。

うつろな目で片づけをする福田、それを見る猫
たち。

壁の時計を見ると、午後三時。

○宮沢ラボ（株）・会議室（午後三時）

会議室の時計、3時を示している。

会議室で話すチーム長と瑞希。

チーム長「人事改革の話だが——」

瑞希「私ならご期待に添えると思います」

チーム長「（笑）そういうアグレッシブなところは買
うけどな。結論はもう少し待ってくれ」

瑞希、口を堅く結ぶが視線は外さない。

チーム長「竹下は今回の仕事、どうとらえる？」

瑞希「プロジェクトの期間も長いですし、いかにチ
ームをまとめ、効率よくスケジュール管理する
か、がネックになると思います」

チーム長「管理者としては優等生の答えだが……」

もう一つ、こう、何かないか？」

瑞希「（悔しい）少し考えてみます。時間を下さい。

——でも、あの福田さんではチームはまとめられ

ないと思います」

瑞希、お辞儀をして出ていく。

○同・ＣＧ部・瑞希の席

瑞希が席に戻ってくると、田中が書類を持って、待っている。

田中「ちよつとアドバイスもらえますか？」

瑞希「いいよ。見せて」

田中「これの動き、なんですけど、（と書類を渡す）」

瑞希、書類を見て一瞬手を止めるが、すぐに分のＰＣで動画ファイルを開き、沢山の花が燃え上がりながら火の鳥に変化する動画を確認、動きが地味でパツとしない。

瑞希「見せ場を決めて、もっと細かく作る。視点はぐつと仰角にして大きさを出して。炎の所、何かワン・アイデアが欲しいかな」

田中「（画面を指して）このあたり全体に、流れるリボンみたいな動きを作るの、どうすか？」

瑞希「うん、いい感じになりそう。作ったら、もう一度見せて」

田中「そうします」

一礼して帰ろうとする田中を引つ張って止める瑞希。

瑞希「それ、福田さんの仕事だよね？　なんで田中がやっているの？」

田中、何か答えようとするが、しどろもどろでおかしい。

瑞希「ちよつと！」

田中「――誰にも言わないこと、約束してください」

瑞希「約束は守る」

田中「先輩、今、画用紙の女、いや、会ったことのない母親を探しているんです。自分も何か手伝いたくて、勝手に始めました」

少しハツとする瑞希。

瑞希「母親探し？　何でそんなこと」

田中「お父さんが遺したイラストがあって、（と、スマホのイラストを見せる）葬式にこの女が来ていたんです。この人がお母さんかもしれない、って

考えて」

瑞希「あの人、母親の顔もわからないの？」

田中「ご両親、先輩が赤ん坊の時に離婚しているんです。小さすぎて記憶がないんですよね」

瑞希、黙り込む。

田中「竹下さん？」

瑞希「(気付く)——福田タワーの物件は難物だから、田中一人だと荷が重いね。私も手伝うよ」

田中「竹下さんだっけかなりオーバー・ワークじゃないですか」

瑞希「仕事を止めておくより、いいでしょう。チーム長には話しておくから。主な作業は、田中がやってよね」

田中「ありがとうございます」

瑞希「聞いていいかな。なんで福田さん、なわけ？」

田中「自分、先輩の仕事にマジ惚れしたんです。見て、一発で心動く、っていうか——、ともかく、すごいと思いました」

瑞希「まあ、腕は悪くないかも。人間は最悪だけだ」

田中「最初は技術を学びたかったんです。でも、ツボはそこじゃないのかも——それと、自分、先輩の態度も嫌いじゃない、っす」

瑞希「ええっ、あれの、どこが？」

田中「矜持っていうか、プロとしての目線の置き方とか。それに不器用に公平って感じ、も」

田中、何度もお辞儀しながら戻っていく。

× × ×

○同・福田の席

瑞希、福田のデスク前に立ち、タワー上のファイルを一冊手に取り見始めるが、手を止めてじっと考え込む。

福田の貼った「絶対触るな！」のメモを見ながら腕組みをして、ため息をつく。

○福田の家・中・宏の部屋(夕方)

宏の部屋で、床に自分の仕事の資料を広げて見ている福田。

書棚には宏の仕事の資料本、趣味の本が整理・

分類されて並んでいる。

福田、人体ポーズの本を取り出す。

中に挟んだ新聞の料理記事の切り抜きに、宏の字

で「昆布茶＋小さじ1・5」と、書き込み。

ゲホッという音。

見ると、1匹の猫が吐き戻して苦しんでいる。

福田、慌ててスマホを取り出し、電話する。

○宮沢ラボ（株）・CG部・中・夕方

追い込み作業で殺気立つ室内。

田中も何冊かの資料を前にして、PCで必死に作業中。

電話が鳴り、見ると福田である。

田中「先輩、今、ちよつと手が離せません」

福田の声「お前の猫が、ゲロ吐いて大変だ」

田中「えーっ、手術ミスかな？ 緊急に医者に診せてください。頼みます」

福田の声「医者あ？」

田中「動物病院。絶対、お願いします。あとで電話しますっ」

電話を切る田中。

○福田の家・宏の部屋・中（夕方）

福田スマホを操作し始める。

○福田のスマホ画面

今日の着信履歴を見るが、ゼロ件。

メールも入っていない。

○福田の家・宏の部屋・中（夕方）

具合の悪そうな猫を、忌々しそうに見る福田。

福田「ションベンの次は、ゲロか」

○吉田動物病院・中・受付（夜）

受付の台に、ピンクとブルーのペットベッドが重ねて置かれる。

受付に立っている福田、驚く。

福田「え？ これ——」

ピンクの看護婦服がはちきれそうな受付係の女（38）が、にんまりと微笑み、その上に、さら

にトイレと猫砂、キャットフード、皿2枚を置く。
慣れた手つきでそれらを大きな手提げ袋に突っ込む。

受付「新しい環境でのストレスですって。しばらく様子、見てくださいね。あ、うちの院長厳選のグッズは、皆さんに大好評なんですよ」

福田「はあ」

受付「ベッド、トイレ、猫砂、ご飯、それと、お皿。さつき、お注射もしたので、(電卓を打ち、金額を見せる)こちらになります」

福田、金額を見て驚くが、シブシブ財布からカードを出す。

受付係、すばやくカードを受け取り、処理する。

受付係「猫ちゃんの避妊手術の抜糸、当院でもできますので、二日後に来てください」

福田「あ、はい」

受付係「(につこり)どうぞお大事に」

巨大な手提げ袋を受け取る福田。

○カフェ・屋外席(夜)

福田が、カフェの屋外席で、足元に大きな手提げ袋とケージを置いて、コーヒーを飲みながらスマホをいじっている。

○福田のスマホ画面

今日の着信履歴を見るが、まだゼロ件。
メールも入っていない。
肩を落とし、ヘッドフォンを外す。

○カフェ・屋外席(夜)

福田、突然前方を見てハッとする。
実物の「画用紙の女」が派手な服を着て、若い男を連れてカフェに入ってくる。
福田の近くを通り過ぎる画用紙の女。
福田、緊張しながら、思わず目で追うが、よく見ると髪形だけが似ている別人である。
福田、大きなため息。

○福田の家・中・玄関(夜)

福田が帰宅すると、玄関で残された猫が待っている。

○同・キッチン・中（夜）

新しいエサ皿でキャットフードを食べる2匹の猫。

真新しいベッドで丸くなり、快適に寝ている2匹の猫。

福田は田中に電話する。

福田「田中？ 医者、行っただ。猫は無事だ」

田中の声「ありがとうございます。あと、ネコ、じゃなくて何か名前で呼んでくださいよ。彼らの情緒に影響しますから」

福田「うるせえよ（と、電話を切る）」

寝ている猫たちを見る福田。

福田「（猫に）お前は吐いてダレていたからダリだ。

お前は、さつき待っていたからマチスだ」

猫たち、すやすやと寝ている。

○同・福田の部屋（午前中）

猫は福田の座っている足元で遊んでいる。

福田はヘッドフォンをしたまま、PCと資料を見つめながら、メモを書いたり、PCをいじって動作を試作したりしている。

福田の電話が振動、見ると知らない番号。

福田「（ヘッドフォンを取り、電話に出る）はい、福田です」

聡子「あ、私、高橋さんからお電話番号をお聞きしてご連絡させていただきました。宇野、と申しますが」

福田「宇野さん？」

聡子「お母さまの事で――」

立ち上がる福田。

○中央シティホテル・ラウンジ（中）午後

高級感のあるホテルのラウンジに午後の光が柔らかく射している。

ボーイがコーヒーを運んできて、テーブルに恭しくサーブする。

テーブルには、福田が、上品で柔らかな雰囲気

の初老の女・宇野聡子（61）と向かい合って座っている。

聡子「私、お母様の短大時代の友人で、宇野と申します」

福田「はい。無理を言って、すみません」

聡子「あの、ご両親、結婚式で初めて出会ったことはご存知ですか？」

福田「先日、高橋さんから——」

聡子「あれ、私の結婚式でしたの」

福田「あ、花嫁って……」

福田、しげしげと聡子を見つめる。

聡子「（少し笑って）もう30年以上前、になりますからね」

福田「いや、あの、母は、当時どんな女性だったんですか」

聡子「そうですね——明るくて、スポーツが得意で真面目で、誰からも好感を持たれる、そんな女の子でした」

福田「親は結婚に反対だったそうですね」

聡子「お父様、弁護士さんでね。一人娘に同業の婿を、って。あの頃、世の中はバブルでね。でも、美保子是三高のお見合い相手より愛を選びました」

福田「なのに、子供が生まれてすぐ両親は別れています。その辺の事情はご存知ですか？」

聡子、ちよつと顔を曇らせる。

聡子「——あなたに——お話しするのは、とても辛いことです。でも、もう私しかないみたいだし……」

福田「すみません」

聡子「誰もが二人は幸せに過ごさだろうと思っていました。でも、出産後、想像できなかったことが起きました」

福田、思わずのりだす。

福田「いったい何があったんですか？」

聡子「美保子は、——自分の産んだ子供に、まったく興味が持てなかったのです。可愛いとすら思えなかった……」

福田、衝撃を受ける。

福田「そんな……」

聡子「カウンセリングや投薬で努力しても、その感覚は治らなくて、子供に触れることもできない自分を責め続けました」

福田「（やっと絞り出して）——原因は、なんだったのですか」

聡子「精神的な病気の一種、だと聞いています。結局、子供を置いて実家に……」

福田「——逃げたんですね」

聡子「私の想像ですけど——きっと、あなたを巻き込まないために、距離をとったのではないかしら」

福田、顔を伏せて考え込んでしまう。

ボーイがやって来て、恭しくコーヒーのお代わりを聞いてくるが、聡子は断り、福田は顔を伏せたまま何も言わない。

ボーイは去っていく。

福田「——で、離婚した……」

聡子「御主人はなんとか関係を保とうとされていたようです。美保子も彼のこと忘れられない。悩み続け、自分を責め続け」

福田「……」

聡子「——自殺を……」

福田、顔を伏せたまま、身体をこわばらせる。

福田「——死んだのですか？」

聡子「幸い、未遂でした。美保子のお父様が、ご主人に頼んで、それから正式に離婚を……」

福田「だから、最初から母なんて、いなかった——」

聡子「赤ちゃんの親権は、ご主人が強く望まれたし、美保子は親権を放棄したそうです」

福田、うつむいて聞いているが、やっと声を絞り出す。

福田「——あの、宇野さんは、その後の母のことを何か聞いていますか？」

聡子、ついに来た、という表情で話をはじめ

る。
聡子「あなたがお母さんのことを知りましたが、聞いて、実は、秘かに美保子に連絡を取りました」

福田「（顔をあげる）えっ？」

聡子「今からお話することは、すべて、美保子から頼まれてあなたにお伝えすることです」

福田、茫然として頷く。

聡子「美保子は、今、パリにいます。離婚後に心が少し落ち着いたところ、お父様の計らいで料理の勉強に行ったのです」

福田「（呟く）海外？」

聡子「心の病を癒すために、環境を変える必要があります」

福田「いい身分だな」

聡子「でも、それが功を奏して美保子は健康を回復できたのです」

福田「（皮肉に）今は、料理人ですか？」

聡子「今は、——フランス人の男性と出会って、再婚しています。子供も二人生まれて、静かに幸せに暮らしています」

福田「……」

聡子「美保子は二度と日本に戻ることはない、と言っていました」

福田「あ、そうですか」

聡子「彼女は、私からあなたにすべてを話してほしいと。でも、一生あなたに会うつもりはない、とも」

福田「俺の母親は、あなたには——居所を知らせていた、そういうことですね」

聡子「私があなたにお話しできることは、これですべてです」

福田「（果然としながら）——ありがとう、ございました」

聡子「こんな役目、私だって本当は引き受けたくありませんでした。お先に失礼しますね」

聡子、そっと会計の札をもつて立ち上がる、お辞儀をして去っていく。

それに気が付くこともできない福田。
ラウンジに柔らかな光が差し込み、ゆったりとした空気の中、福田だけが重い岩のように、動かずに座っている。

○帰り道・路上・外（夕方）

駅に向かう道を急ぐ人々。

福田が硬い表情で流れに逆らって、ゆっくり歩いている。

福田「（急に怒鳴る）なんなんだよっ」

周りの人が見ている。

ヘッドフォンを装着し、大音響の音楽の中、猛烈な勢いで歩き出す福田。

怒ったような顔で、速足のまま歩き続ける福田、横断歩道を渡り、ビジネス街を抜け、繁華街のネオンが点き始める街を通り過ぎ、人気がない神社の前を過ぎて、ひたすら歩いていく福田の姿、徐々に暗くなる歩道を一人突き進んでいく。

○歩道・外・（夜）

福田の足元がアスファルトの歩道を踏みしめながら、ノロノロと歩いてくる。

歩速がどんどん遅くなり、ついに足が止まる。

○宮沢ラボ（株）の入る建物の前・外（夜）

ヘッドフォンを外した福田が、おもむろに顔をあげて見ると、目の前に、自分の会社の建物が見える。

会社のフロアには、白々とした電気が灯っている。

福田、スマホで電話をかける。

福田「田中？ 飲むぞ。すぐ出て来い」

○居酒屋「こいずみ」・中・（夜）

小上がりのある落ち着いた感じの居酒屋。

福田が座敷席で、一人飲んでいる

田中が瑞希を伴ってやってくるのが見え、露骨に嫌な顔をする福田。

田中「先輩、お疲れ様です」

福田「おまえ、余計なものまで連れてきやがって」
瑞希は顔色一つ変えず、メニューの生ビールを指さし、田中に見せる。

田中「生2つお願いします。竹下さんは業務報告があるそうです」

瑞希はバッグから作業報告書を出す。

瑞希「確認、お願いします」

ところどころにポストイットが貼ってあり、福田に意見を求めるところがある。

福田、目を通し、問題がないようなので、サインをしてOKと書き、瑞希に返す。

瑞希はそのまま、ビールを飲んでいる。

福田「今日、相手に会ってきた」

田中「例の、高橋さんの知り合いですね？」

田中、ちよつと瑞希を見る。

瑞希「部外者は向こうで食事するから（と、ジョッキを持ってすぐ脇のカウンター席に移動する）」

田中、頷く。

田中「何かわかりましたか？」

福田「すげえ進展だったよ（と、田中に冷酒を注ぐ）」

田中「そうですか！（喜んだ顔）」

○同・カウンター席（夜）

焼き鳥を食べながら、後方の福田と田中の様子をうかがっている瑞希。

○同・中・（夜）

福田の席に並ぶ沢山のビールジョッキやお銚子類、漂う重苦しい空気。

田中「（暗い顔）——自分が画用紙の女探しをしようなんて言ったからです。すみません」

田中、フラフラと席を立て、歩き出す。

福田「（田中に）おい、もっと飲むぞ」

田中「トイレ、っす」

田中の姿を目で追うと、無表情で見ている瑞希と目が合う。

福田「（瑞希に）女は、打算的で残酷だよな。ナイフで突き刺しても、男なら黙って耐えるべきだって、思っついやる」

瑞希「女でも、男でも、人を刺した人間は自分も血まみれです」

福田「——どうだかな」

瑞希「結局、画用紙の女探しは、終わってないですよね」

福田、「画用紙の女」と言う言葉を聞き、ハツとする。

瑞希、近づいてきて、福田に向き合う。

瑞希「危機管理的な提案ですけど」

福田「——なんだよ」

瑞希「福田さん、一人で女性探しをしたら、セクハラ問題が起こりそうです。女性を同伴したほうが、警戒されなくて良いと思う」

福田、ムカつく。

福田「大きなお世話だ」

瑞希「明日だったら、私は前作業の待ちで時間が取れます。ご一緒しましょうか？」

福田「恩を着せるつもりだな？」

福田、瑞希の顔を見るが、無表情のままである。

瑞希「どうします？」

福田「(嫌々)——じゃ、頼む」

瑞希「お願いします、ですよね？」

福田「(シブシブ) お願い、する」

瑞希「わかりました」

瑞希、立ち上がる。

瑞希「田中、見えます」

福田「あいつ、トイレに行ったきりだな」

○同・トイレの近くの廊下・中(夜)

瑞希がしゃがみ込んでいる田中を見つける。

瑞希「田中、どうかした？」

顔を上げる田中、ぐしょぐしょに泣いている。

田中「——すぐ、戻りますから」

瑞希「何でこんなところで……」

田中「自分のおせつかいがこんなことになって……自分、どうしたらいいのか」

瑞希「結果は、田中のせいじゃないよ」

田中「先輩のお母さんは、ひどすぎます」

瑞希「——あの人、今、どんな気持ちなんだろう」

田中「自分なんかには、わかりませんよ。——でも、あんなお母さんにバチが当たaranakya、不公平っす(鳴咽)」

瑞希「そうだよね。——子供を棄てるようなヒドイ母親なんか、バチ、当たるべきだ」

瑞希、突然、田中の髪を掴み歩き出す。

田中「痛たたた、なんすか？」

瑞希「帰るよ。田中は酔いを醒ましなさい。まだ作業、残ってるよ」

○同・福田の席(夜)

瑞希が田中を引っ張って戻る。

瑞希「帰ります。仕事が残っています(と、お金をテーブルに置く)」

福田「(啞然として) おい、田中？」

田中「あ、自分、トイレで寝てました」

瑞希に強引に連れられて帰って行く、田中。

○路上(夜)

後ろ手に田中のシャツの胸倉を掴んだまま、口を堅く結んで歩き続ける瑞希の顔を田中が見る。

田中「泣いてます？」

瑞希「まさか。余計なものをしよい込んだ自分にムカついているだけ。——ったく、田中のせいだ」

田中「何か分からないけど、すみませーん(と、また、泣く)」

二人、歩いていく。

○福田の家・キッチン・中(夜)

福田が酔って帰宅して入って来る。

猫のベッドを見るが、猫たちがいない。

福田「おーい、マチス、ダリ」

猫の動く気配はない。

見るとエサ皿が空である。

福田、エサ皿にフードを入れ、水を取り替える。

福田「(猫のいそうな空間に向けて) お前ら、痛い手術だったけど、子供なんて産まずにすむんだ。——ラッキーだったな」

福田、フラフラとキッチンの電気を消す。

○同・福田の部屋・中(朝)(日替わり)

福田が、ベッドに寝ているが、その布団の上に猫二匹が乗って寝ている。

福田、寝返りを打とうとして、猫に気が付き、そっとそのまま動かないようにする。

携帯に着信音。

そつと携帯をとると。老人ホームからメールが入っている。電話を操作してメールを開く

○メール画面

「福田様

お問い合わせをいただきましたお祖母さまのご容態の件で、ご連絡いたします。ここ数日とても落ち着いた状態が続いております。お話をされるには、良いタイミングかもしれません。取り急ぎ、ご連絡まで。

介護ホーム・ロータス」

○福田の家・キッチン・中（朝）

福田、パンをかじりながら猫の餌をやる。

猫たち、福田にまわりついている。

猫のトイレをセットして家を出る福田。

○駅前・外・（午前中）

中規模のターミナル駅、たくさんの人が行きかう。

福田の視界に、首から下げたスマホを見ながら、辺りをキョロキョロしている瑞希が見える。

福田「おい」

瑞希、福田を見て無表情に手をあげる。

瑞希「先ず、どこへ行きますか？」

福田「ばあさんのいる施設だ」

瑞希「何かありましたか？」

福田「容態が落ち着いているらしいから、行って父親が死んだことを話す。それから画用紙の女探しだ」

瑞希「わかりました。一応、私にも画用紙の女の画像を送ってもらえますか？」

福田、頷き、写真を転送する。

スマホに入った写真を見る瑞希。

瑞希「ピン트가あつてないですね」

福田「田中が撮ったからだ」

瑞希「修正できないかな（と、スマホをいじり始める）」

距離を取りながら、駅の中へ消えていく二人。

○同・祖母の部屋・中（午前中）

狭い個室の片側に寄せられたベッドに寝ている
痩せた老女・福田佳代（87）がこちらを見て
いる。

福田が歩み寄る。

福田「ばあちゃん、元気そうじゃない」

佳代が嬉しそうに福田を見る。

佳代「おや、歩かい？」

瑞希が後ろでスマホの写真のピント修正をして
いる。

福田「（瑞希を前に押し出して）こちら、同じ会社の
竹下さん」

瑞希「竹下です。こんにちは」

瑞希、にっこり笑ってお辞儀をするが、押し出
された反動でスマホが手からはずれ、ネックス
トラップにぶら下がったまま画面が佳代の顔の
近くに来る。

佳代、スマホの画面に目を移す。

見る見る怒りの表情になり、スマホを握りしめ
て引っ張るので、瑞希が首を引っ張られ、福田
が慌てて、佳代と瑞希を引き離す。

佳代「（興奮して瑞希に向かって）ミナミさん！ あ
なたって人は！ 私の前で、もう会わないって約
束したばかりじゃないですかっ」

福田「竹下っ、誰か呼んでくれ」

瑞希、枕元のベルを押して、廊下へ。

瑞希「（外へ）あの、誰か！」

佳代、福田を睨んで

佳代「宏っ、このバカ息子っ」

佳代、福田に掴みかかろうとするが、急にせき
込み、胸を押さえて蹲る。

駆けつけてきた職員、佳代を抱きとめ、二人に
出ていくように目配せする。

福田と瑞希、毒気を抜かれた感じで部屋を出
る。

○同・中・廊下

福田と瑞希は困惑した表情で、廊下の長椅子に

座る。

瑞希「今の、って……」

福田「みなみさん、とか言ったな——」

瑞希、「画用紙の女」の写真を出して

瑞希「画用紙の女を、おばあ様は知っている。きつと、そうです」

福田、祖母の部屋を覗いてみるが、首を横に振る。

福田「今日はダメだ」

瑞希、スマホの写真を見て、ちよつと考えこむが、急に立ち上がる。

瑞希「これって、すごい手がかりです。『みなみ』という名前の付く人を葬儀当日の会葬者名簿から探せば……」

福田「会葬者名簿か」

瑞希「名簿はどこに？」

福田「家、だな」

瑞希「お宅に行きましょう。名簿から、この、みなみさんを探すんです。画用紙の女本人、または関係者がわかるかも」

と、踵を返して、歩き始める。

福田「あの、竹下——、男の家に……」

瑞希、ずんずん先に歩き出している。

福田「気にするほうが、アホ、みたいだ」
後をついていく福田。

○福田の家・中・キッチン

福田と瑞希がキッチンに入ると、入り口で猫たちが待っている。

キッチンのダイニングに瑞希を座らせ、お茶を出す。

福田「今、名簿を探してくる」

瑞希「付箋紙とメモも、お願いします」

瑞穂、まわりつく猫を触っている。

× × ×

福田が名簿数冊をもつて戻ってくると、瑞希は机に伏して寝ている。

福田がそつとお茶を下げると、瑞希が起きる。

瑞希「あ、ごめんなさい」

福田「あんたも、休まない人間だよな」

瑞穂、ちよつと驚くが名簿を手にする。

瑞穂「夕方には担当の仕事が回ってきます。早く片付けましょう」

福田「じゃ、始めるか」

それぞれ名簿を広げる。

瑞希が名簿を見ながらつぶやく。

瑞希「余計な時間ができると、考えたくないことが頭に入ってくる、それが怖いんです」

福田は、名簿を見続ける瑞希を見る。

福田「あんたも、そうか」

作業を続ける二人。

× × ×

テーブルの上に付箋紙の貼つてある会葬者名簿と、「南田芳江」「三木みなみ」2名の名前が書いてあるレポート用紙。

福田「手がかりになりそうなのは、この二人か」

瑞希「仕事の関係者なのか、それとも個人的な付き合いのある人なのか。それぞれ調べてみましょうか」

福田「先ず、仕事関係の人にもう一度当たってみるか」

福田、高橋に電話する。

○高橋デザイン事務所・中

こじんまりしたオフィスで節子と他2名の若手の社員が工作中。

高橋の携帯が鳴り、節子が電話をとる。

節子「はい、高橋デザイン事務所です」

福田の声「あ、先日はありがとうございました。福田です」

節子「いいえ。宇野さんからいいお話が聞けました？」

福田の声「言葉を濁す」ええ、まあ。——あの、今日はもう一つお伺いしたいことが」

節子「何かしら」

奥から高橋がやって来て節子の方に来る。

高橋「誰だい？」

節子「福田さんの息子さん。で、何でしたっけ？」

福田の声「父の知り合いで、こういう名前の女性を知りませんか？ 南田芳江さん、三木みなみさ

ん、またはミナミさん」

節子、聞きながら名前をメモ紙に書く。

節子「(考えて) あー、残念ながら私の知る範囲では
いませんね。あなた、知っている? (メモを見
ながら) 南田芳江さん」

高橋「知らない」

節子「じゃ、三木みなみさん」

高橋「うーん(首を横に振る)」

節子「例えば、ミナミ、なんとかさんは?」

高橋「いや、知らんね。——あ、でも、今思い出し
た」

高橋が電話をかわる。

高橋「親父さんさ、よく三木スタジオっていうところ
のカメラマンと仕事していたなあ。名前は覚えて
いないんだけど」

○福田の家・キッチン・中

福田、電話を切るが、考え事を始める。

瑞希「何かわかりましたか?」

福田「三木スタジオのカメラマンと仕事をしていた
らしい」

瑞希「すぐ、三木スタジオ、探しましょう。その
関係者かもしれませんね。女性のほうが良けれ
ば、私が電話に出ますから」

福田、瑞希に背を向ける。

福田「いや、もう充分だ」

瑞希、げんな顔。

瑞希「私、あと30分くらい大丈夫ですけど」

福田首を横に振る。

福田「いや、この件はもう終わりだ」

瑞希「何、言っているんですか?」

福田「この女が誰だろうと、きつと大した問題じゃ
ない。わざわざ、来てもらって——」

瑞希「もう少しなのに。まさか、会えそうになっ
てきて怖気づいた?」

福田「(目を合わさない) 捜されているこの女だっ
て、いい迷惑だ。過去の話なんて、うろ覚えに違
いないさ」

瑞希、突然テーブルを激しく叩き、福田と向き
合う。

瑞希「あんた、なんて腰抜けなの！ 戦いなさいよ！」

福田もムカつき、大声で怒鳴る。

福田「なんだよっ、その言い草」

瑞希「そのオレ様が腰抜けだから、腰抜けだと言っただけ。最後の最後に、怖気づいたんだ？」

福田「バツイチの子持ちが、偉そうに！ あんたの家庭もぶっ壊れたんだってな。どうせ棄てられたんだろう」

瑞希、一瞬息をのむが怒りに震え

瑞希「——そうよ。仕事をし過ぎた私が、家庭をぶっ壊した。私は、あんたの母親の上に行く、ダメ人間よ」

福田「だろうな」

瑞希、真剣に話しはじめる。

瑞希「離婚の時、お前の生き方は子供を苦しめるだけだって責められた。頭が爆発するくらい悩んで、子供のために親権を手放した」

福田「竹下……」

瑞希「私のこと忘れるくらい幸せなら、それでいい。でもね、もし違ったら？ 考えだすと怖くてたまらなかった」

福田「もう、やめろ……」

怒りの表情のまま、涙をためている瑞希。

瑞希「考えて、考えて——私みたいな女は、せめて自分の道を歩き続けなきゃならないことだけは、わかった」

福田「……」

瑞希「だから逃げない。私は戦う」

瑞希の目から一筋の涙。

目をそらす福田。

福田「あんたの子供だっていずれ分かる。過去なんて追いかけても変えることはできないんだ」

瑞希「なに、それ？」

福田「だったら、見ない、触らない、そのうち忘れ、気にならなくなる。それが一番利巧な生き方だ」

瑞希は、軽蔑したように福田を見る。

瑞希「——最初は無視できる。でも、どんどん大きくなって、いつかあなたはその重みに動けなくな

り、呼吸すら苦しくなる。今を逃したら、追いかけても、届かなくなってるから」

踵を返し帰って行く瑞希。

黙って背を向けたままの福田。

○同・宏の部屋・中

宏の遺影の前で座り込む福田。

手近にあったスケッチブックに、オデン屋台で酒を飲む父のイラストを描く。

その隣に自分を書き加えるが、急に自分だけを真っ黒に塗りつぶしてしまう。

苦悶にゆがむ福田の顔。

○同・福田の部屋・中

ヘッドフォンをかけて大音響の音楽を聴きながら、自分の部屋で田中の持ってきた資料や、原作本を読みふける福田。

CGを試作して動かしてみたりする。

作業をしている福田の顔はいつの間にか集中して輝いている。

ふと、傍らに放り出してあった宏のスケッチブックの「画用紙の女」の絵を手に取り、じっと見つめる。

頭からヘッドフォンを外し、傍らのゴミ箱の中にぶち込む。

スクランして取り込み、PCディスプレイに映し出された「画用紙の女」を対決する相手のように見つめる福田。

急に検索サイトで「三木スタジオ」を調べる。

代表者三木正治という名前のある、三木スタジオのHPが表示されているディスプレイを見る。

スマホで電話をかけようとすると、着電がくる。

○スマホ画面

「チーム長」の表示。

○福田の家・福田の部屋・中

福田「（電話に出る）福田です。チーム長」

チーム長の声「家の方は少し落ち着いたか？」

福田「今から仕事に戻ります」

チーム長の声「それはまだダメだ。でも、明日外で会えないか？」

福田「明日ですか？（何かに気が付き）午後なら大丈夫です」

× × ×

インター・フォンの音。

○同・玄関・中（夜）

田中がスーパールの袋を掲げて、深々と頭を下げている。

田中「おせっかいの、お詫びに来ました」

福田、袋をのぞき込む。

オデンの練り物やダイコン、コンニャクなどが入っている。

福田「で、俺が作るのか？」

田中「——いえ、自分が……（自信なさげ）」

福田「（袋をひったくる）寄せ」

袋をもって中へ入っていく福田の後を、子犬のようについていく田中。

○同・キッチン・中（夜）

キッチンで、福田と並び立ち大根を切る田中。

田中「（切りながら）じゃあ、もしかしたらその三木スタジオに、画用紙の女が？」

福田「（コンロの鍋のだしの味を見ながら）あさって、確かめに行ってくる」

田中が不器用に大根の皮をむいているので、福田が、皮むき、面取り、隠し包丁を入れて見せ、田中再度挑戦。

田中「早いほうがいいですよ。明日は？」

福田「明日はマチスとダリの抜糸の日だ」

田中「！（驚き、大根を切り飛ばし、慌てて拾う）」

福田「午後チーム長とも会うことになった。あさつての三木スタジオ、田中も一緒に行くか？」

大根をラップして電子レンジにかけて、あつちへ行くと、ジェスチャーする福田。

田中、福田の後ろに立ちながら

田中「——先輩、自分は今回遠慮します」

福田「画用紙の女、かもしれないぞ」

田中「前に、自分、うちは普通の4人家族、って言いましたよね」

福田「ああ」

田中「あれ、途中からです。元は母子家庭で、母が娘のいる人と再婚して、高校から岩手に引っ越しました」

レンジの終了音がして、大根を取り出す福田。

福田「そうか」

田中「父と妹ができて嬉しかったんです。父も妹も程よく真面目で堅物で。ああ、いい縁を貰ったなあ、って、感謝しました」

だし汁の鍋に材料を次々と入れ、煮込みはじめる福田、オデンを見つめ何か考えている。

福田「――だったら、何で、家族から離れて一人でいるんだ？」

田中「父が、妹のことを心配しているのが見えちゃって。自分って外見が、こうじゃないですか。やっぱねえ……」

福田、冷蔵庫を開けてのぞき込む。

○同・冷蔵庫の中

10缶くらいのビールとワンカップ酒1本が見える。

○同・キッチン・中（夜）

福田、冷蔵庫からビールを2つ出して、田中に一つ手渡す。

福田「その外見をやめろ。それで解決だ」

田中「これには、アーティストとしてのポリシーがあるんです。で、自分が家を出ました」

福田「アーティスト、ね」

田中「自分は才能がないから、外見でかまさないと。――あの、実は、ずっと思っていたんですけど（と、福田を見る）」

福田「なんだよ（服のことを言われると思い、自分のだらだらの部屋着を見る）」

田中「画用紙の女は、絶対、何か、先輩と縁がある人です。会えるといいですね」

福田「――うるせえよ（福田、ビールを開ける）」

× × ×

テーブルの中央に、タオルが敷かれ、その上に煮上がったオデンの鍋。

田中が福田と自分の分をよそい分ける。

田中「その、チーム長の件、何かありますね」

福田「きつと会社で言えない小言だろう。人間関係がどうの、コンプライアンスがどうの、とか……」

田中「内示ですよ、絶対（福田に少なめのほうの皿を渡す）」

福田「（田中の大盛り皿を見ながら）何の？」

田中「プロジェクトに向けての人事改革ですよ。Cチームのリーダー候補に竹下さんと先輩が挙がっているって噂です（早速かぶりつく）」

福田「――リーダー？」

田中「（食べながら）でも、わざわざ呼び出し、とくれば、先輩で決まり、ですネ」

福田「人事には全く興味ねえ。どうでもいいわ」

田中「へ？」

福田「それより、（のりだす）今度のプロジェクトは実に面白いぜ。あれは一生に何回出来るか、ってレベルのやつだと思う」

田中「あ、そうっすね……」

福田「あの資料を全部読み込んだ。やってみたいアイデアが次から次へと湧いてくる。久々に、ゾクゾクさせてもらえそうだ」

田中「――そうっすね」

福田「相当フレキシブルに動けるチーム環境が必要になるな。人事なんて、そういう環境を提供できれば、どうだっていいのさ」

田中「そうっすね！」

福田「例えばだな、イントロの見せ場、双子の遺伝子に魔術が組み込まれるシーンは（スケッチブックに図解しながら）こんな風にさ――」

田中、夢中で話す福田につられて、どんどん前に乗り出していく。

○同・宏の部屋・中・（夜）

宏の遺影の前にワンカップ酒と、オデンの皿が置かれている。

○カフェ・中（日替わり）（夕方）

チェーン展開の簡単なカフェの椅子席。

チーム長と福田が向き合って座っている。

チーム長「――新プロジェクトのために、組織改革を、というのが目下の方針なんだが……」

福田「はあ」

チーム長「福田は問題ゼロ、とは言い難いが、一番の実力派だ。意見があれば聞きたい」

福田「人事に意見はないです。ただ、組織文化について提案があります」

チーム長「お前がそんなことを言い出すのは珍しいな。聞こう」

二人、真剣に話し合いに入る。

○三木スタジオ・外（日替わり）

三木スタジオの前にこざっぱりしたジャケットを着た福田が立っている。

意を決し、中に入る。

○同・中・入口

受付カウンターに中年の男性が立っている。

福田「あの、三木みなみさん、いらっしゃいますか」

男が中に入り、入れ替わりにボブ・ヘアの女・

三木みなみ（59）が出てくる。

画用紙の女、である。

みなみ「お待たせしました――」

福田を見て、一瞬息をのむみなみ。

福田「福田歩、と言います。あの、先日亡くなった

福田宏の息子です」

みなみ「三木みなみです（微笑む）」

二人、見つめあう。

○同・応接間・中

ソファセットに向き合っている福田と、みなみ。

福田がリュックから宏のスケッチブックを取り

出し、「画用紙の女」のイラストを見せる。

福田「父のイラストです。あなたは父の葬儀に来てくれていましたよね」

南、スケッチブックを懐かしそうに見る。

みなみ「不思議な気持ちです。今、私がこの絵を見ているなんて」

福田「父をご存知ですね」

みなみ「ご葬儀には、どうしても行きたかった。お礼とお別れを言いに。——私たちね、昔、お付き合いをしていたんです」

福田「(ちよつと驚く) いつ頃のことですか？」

みなみ「20年以上前になります。たぶん、あなたが5歳くらいの時かしら……」

福田「ああ、だから……(と、スケッチブックの絵を見る)」

みなみ「私、広告のカメラマンをしていて、仕事で知り合いました。私も夫を亡くして子供が一人いて、とても話が合ったんです」

福田「父と再婚は考えなかったのですか？」

みなみ「真剣に考えました。彼のような人と出会えることはもう二度とない、と思ったし」

福田「だったら、何故？」

みなみ「私にはあなたより少し年上の息子がいることで、宏さんのお母様に反対されて……」

福田「祖母が、ですか？」

みなみ「おばあ様は、ご長男としての、孫のあなたの立場を守りたかったのだと思います」

福田「祖母と会ったことがあるのですね？」

みなみ「(頷き) 私も夫が遺したこのスタジオを息子に譲りたかったし。お互い子供の事を考えて、お別れしたんです」

福田「そんな！ あなたとなら父は幸せになれたのに——。その時、もう少しだけ頑張ってくれたら、父の人生は変わったんだ！」

みなみ「福田さん？」

福田、興奮気味に訴え続ける。

福田「あなただけが、父を救えたんですよ——俺が父の人生を台無しにした。あげく、こんなに早く、急に。もうどう謝ればいいのか……」

みなみ、黙って福田を見ている。

福田、感情的に話しはじめる。

福田「俺は——生まれたことを呪いますつ。俺なんかいなければ……。」

みなみ「そんな……」

福田「いつ手を放されるか怖かった。空気なんて読めないと思われたほうが楽だった。ああつ、もう、何、言ってるっ……」

福田、自分の頭を抱えて蹲る。

みなみ、席を立つ。

みなみ「ちよつと待っていてくださいね。すぐ戻ります」

みなみ出ていく。

○同・キッチン・中

みなみ、パンツとふってから、エプロンを身につける。

カウンターで、大きめのボウルの中に小麦粉と水、塩を少し入れて練り始める。

生姜を刻み、キャベツ、ニラを刻み、ひき肉と混ぜて、調味料を入れて練り上げる。

小麦粉の生地を長く伸ばし、小さくちぎり、丸め、それを小さな麺棒で手早く丸い皮に仕上げていく。

みなみの手の中で餃子が包まれていく。

○同・応接間・中

福田の前に山盛りのゆでたて餃子の皿、箸やたれの入った小皿が置かれる。

福田「え？」

みなみ「お父様は餃子がお好きだったから、これはご供養のために作りました。召し上がってください」

福田「いや、結構です」

みなみ「（強引に箸を持たせる）是非、召し上がってください」

福田、シブシブ箸をつけて、一つ食べるが、その瞬間驚く。

福田「これは——父の味だ——」

みなみ「お父様に餃子の作り方を教えたのは私です。彼、何度も失敗して、でも絶対息子に食べさせてやりたいって言って」

福田「あなたに教わったんですか——」

頷きながら、画用紙を手にするみなみ。

みなみ「（イラストを見て）この絵の事を聞いたこと

があります。——ある日、息子がママの絵を描いて、って言いだして困った、って——」

福田「何故か、あなたを描いた」

みなみ「事実は知らせたくないから、私に似せて絵を描いて、ママは餃子の達人だって、嘘の話まで聞かせてしまった、って」

福田「……」

みなみ「小さい子供と二人きりの人生に迷って、何度か、もう死んでしまおうかと思った、と言っていました」

福田「あの父が、ですか？」

みなみ「——でも、息子は、いつでも自分を信じようとしてくれる。嘘でも丸ごと信じてくれる。あの子がいるから生きて来られた、って」

福田「——嘘だ」

みなみ「信じられない？」

福田、首を横に振る。

みなみ「——親ってね、何かをしてもらうよりも、何かをしてあげられる、その喜びのほうが生きる力になる、そんなものなの」

福田「……（目の前の餃子を見つめる）」

○同・テーブルの上

皿の上にある山盛りのゆでたての餃子から、柔らかに美味しそうな湯気が上がっている。

○同・応接間・中

みなみが福田の取り皿に餃子をのせる。

みなみ「歩さん、あなたは大切な人だったの。彼が人生を生きるためには、絶対に必要な存在だったんです」

福田、堰を切ったように、餃子をどんどん食べ始める。

みなみ「沢山召し上がってね。お腹が温まると元気が出てくるわ」

福田、黙ってうなずく。

みなみ「プーアル茶、淹れてくるから、ゆっくり食べていてね」

みなみ、出ていく。

ジャケットを脱ぎ、シャツの腕をまくり、上気

した顔で餃子を食べる福田。

○会社への道・外（夕方）

沢山の学生が楽しそうにグループになってしゃべりながら歩いて行く後姿。
向かいから福田がスマホを操作して歩いてくるのが見える。

学生たちとすれ違いながら、会社の瑞希のアドレスにメールをする。

（画面にメールの画面がでる）

福田のメール（読み上げ）「今日、画用紙の女に会った。これから出社する予定」

すぐに瑞希から☎で返信。

瑞希のメール（読み上げ）「お疲れ様。了解です」

福田は歩きながら、田中に電話をかける。

田中の声「（すぐ出る）先輩！ 画用紙の女でしたか？」

福田「実物に会ってきた」

田中の声「やっぱり実在していたんですね」

福田「田中のおせつかいのおかげで、会うことができた。礼を言う」

田中の声「へへ、自分のおせつかいが役に立ってよかったです」

友達と歩かずに、一人でトボトボと歩いてくる男子学生とすれ違う福田。

ちよっとその学生を見る。

福田「ずっと、画用紙の女を追って来ただろ。で

も、最後にたどり着いたのは、今の俺と、歳の変わらない一人の男だったよ」

田中の声「男、ですか？」

福田「あのイラストは、三木さんだけど、三木さんじゃないんだ」

田中の声「はあ……」

福田「小さな子供を抱えて人生に迷っている若い父親の姿だった。――描くって、自分を通してその時代を表現すること、だよな」

田中の声「――それって、自分たち絵描きの基本、でしたね……」

福田「これから出社するから」

田中の声「あ、人事改革中止です。でも個人の意見

反映の場を増やすみたいです。先輩、大暴れできる環境が整いましたよ」

福田「だが、会社の連中への裨が先だな。今日は、俺の吊るし上げが待っているんだろう？」

振り返り、さっきの一人でいた男子学生を見ると、いつの間にか数人の友達と歩いている。まぶしそうに逆光の空を見上げる福田。

○宮沢ラボ（株）・CG部・中・田中の席（夕方）

田中が座席で、仕事をしながら、電話をしている。

ディスプレイの上に小さな猫の置物がびっしり並べて置いてある。

田中「血祭りですね。皆、仕事が遅れて、先輩への怒り、爆発寸前ですよ」

福田の声「明日からはあの新作に全力投入したい。言われれば、土下座だってしてやる」

田中「悪魔的に笑う」それで終わりますかね。ところで、マチスとダリ、元気ですか？」

福田の声「傍若無人の猫地獄だ。写真、送る。じゃ、あとでな」

電話が切れ、写真が送られてくる。

田中、スマホの写真を見て頭を抱え

田中「うわっ、ヒドイ！ これはあんまりだ」

田中、スマホの写真をPCに取り込む。

田中「でも、ま、壁紙にでもしてやりますか」

田中、意地悪な笑顔で壁紙の設定をする。

○宮沢ラボ（株）の入る建物表の道・外（夕方）

福田が立ち止まって、会社の建物を見上げている。

会社のフロアには煌々と明るい電気がついていてる。

○同・CG部・中（夕方）

スタッフが仕事中で、活気のある室内。

やや緊張し、ぎこちない仏頂面で入ってくる福田。

遠くから瑞希がその様子を見ている。

福田を見つけた同僚たちが通りすがりに声をか

ける。

同僚A「あ、福田さん、ついに出社ですね。待っていたんですよ。あとで質問に行つていいですか？」

福田「え？ ああ」

同僚B「休まれて異常に大変でした。でも、戦力百万倍です。頼りにしています」

福田「お？ うん」

福田、仏頂面を持て余し、そそくさと速足で障害物をよけながら、自分の席に向かう。

○同・CG部・中・福田の席（夕方）

福田、拍子抜けしたように自分の席に座り、自分のPC電源を入れて、早速仕事モードに入る。

瑞希が少し近くまで来る。

瑞希「お疲れ様です。何か飲みます？」

福田「あ、お願いします（と、頭を下げる）」

瑞希は少し驚くがそのまま戻る。

福田は、目の前にあった「絶対触るな！」とメモが貼ってあるファイルのタワーが半減しているのに気が付き、慌てて、PCのスケジューリングファイルから、納品状況を確認すると、自分担当の仕事が半分、完了している。

福田「（少しムカつく）触るなって——」

慌てて、システムの完了ファイルから納品済みの作品を探し、一つずつ見始める。

福田「（完成動画を見て少し驚き、呟く）——、合格品質だ。こっちは——」

別の動画を開ける。

福田「——悪くない」

次々と動画を開き、確認する。

福田「……（じつくり見る）」

○同・福田の席のディスプレイ画面

燃え上がる花々から出た炎が火の鳥に変わる。仰角でとらえた羽ばたきに迫力があり、炎がリボンのような動きで燃え上がり、羽、一枚一枚の震え、煌めきが美しく表現できている。作品の制作者を見ると、自分の名前、福田歩の

後に、田中勇太、竹下瑞希、と署名がある。

○同・アイランド・カウンター（夕方）

瑞希が遠くの席にいる福田を見る。

「竹下私物」のラベルが貼られたコーヒーの缶に手を伸ばし、ペーパーフィルターにコーヒーを入れ、丁寧にドリッブコーヒーを作る。カップに注ぎ、持っていく。

○同・福田の席（夕方）

福田がファイルを開けて、確認している。そのわきにそっとコーヒーを置き、立ち去る瑞希。

福田が良い香りに気が付く。香りを感じながら、コーヒーを一口飲む。福田の体中に温かいものが沁みるように広がっていく。

○同・福田の席のディスプレイ（夕方）

突然、ディスプレイの画面が歪みだす。

福田、ディスプレイを何度も布で拭くが、歪みはひどくなるばかりだ。

○同・福田の席（夕方）

福田が自分の頬を触ると涙が流れている。

福田「なんでだ？」

福田、指で涙をふくが、次から次へ、ただ涙が出て来て、止まらない。

○同・田中の席（夕方）

田中不在の席。

猫の置物が張り付けてあるディスプレイに出ている壁紙の写真は、マチスとダリがモデルの温かいイラストが描かれた画用紙の上に、実物のマチスとダリが、我が物顔で横たわっているもの。イラストの左下に小さく福田のサイン。

（終わり）